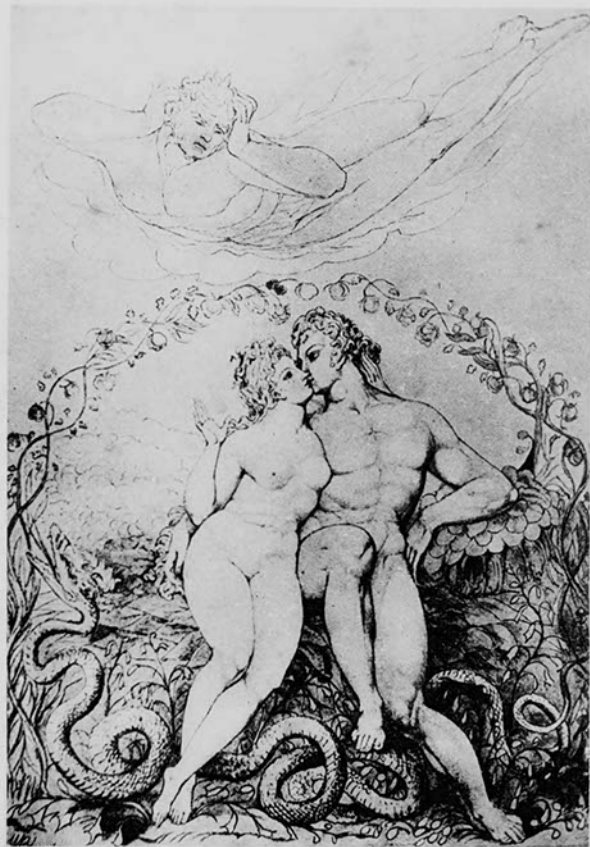


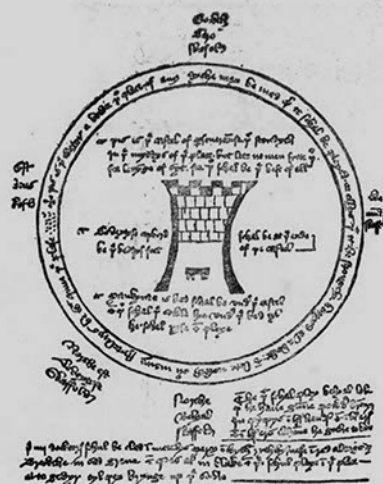
彼等自身

新 年 號



大正十四年十二月二十日發行 大正十五年一月一日發行（每月一回、日發行）





彼等自身 一月 號

第二卷
第一號



歐洲古代
彫刻品の
頒布に就て

『山村暮鳥
感想集』の
豫約出版

去る十一月、いはらき記念館にてその即賣展覽會を開催し、四日間に四百餘点を賣り捌いて、異常なる盛況をみたものであります。中には、その初日に品切れとなつたものもあるが、希望者が續出するので、本社は直ちに補充品を取揃へ、實費でどなたにでも提供いたしてをります。尙三月頃に『第二回即賣會』を水戸市で開く豫定であります。御希望者は二錢切手封入にて下記へ御紹介くださらば、定價目録を直ちに御送りいたします。目下本社にあるのは、埃及・九種、希臘・十種、伊太利・四種、佛蘭西中世紀・九種で五十錢から百圓までのものです。

詩聖山村暮鳥！氏はもはや、日本の、東洋の暮鳥ではない。世界のか、いらない。時空を超え、あらゆる賞讃を絶した異常なる存在、人類の恒星である。大地のどん底の慘苦と寂寥とを文字通りに血を以て淨め、寂びに徹し、睿智の奥底に天眞の單純さを抱り、天使のことばを地上に叩く、その驚歎すべき豫言者の魂を自分達は詩聖山村暮鳥にみる。それはまつたく奇蹟的な出現であつた。まこと莊嚴なる人間の生、この生を生き、この生に永劫の光輝を投じた久遠の人、それが、どこに誰が、わが暮鳥を措いてあるか！こうした暮鳥氏の最も深き思索精進の跡を尋ねる、唯一至便の寶鍵、それがこの『山村暮鳥感想集』である。希望者が定數に達するを待つて、本社はこの永遠の書を江湖に送るであらう。希望者は本社宛に申込まれたし。

◇ 四六版・約二百頁・定價一圓 ◇

一町神荒市戸水

社身自等彼・社源桃

彼等自身

一月號目次

感想 (讀稿)	山村 暮 鳥	一
ヘルデルリーン詩抄 續譯	吹 田 順 助	四
朝 顔 (詩)	高 橋 元 吉	九
遙 拜 (詩)	宮崎 安右衛門	二五
斷 章 (詩)	土 方 定 一	二四
冬夜抄 (詩)	津 川 公 治	六
鷄 肋 (隨筆)	江 木 禮 吉	六
愚草庵雜記 (感想)	金 子 達 雄	三

去年の歌の中より (短歌)	蓬 原 生	二八
沼のほとり (短歌)	小 泉 純 一	三〇
從 兄 (小説)	木 暮 亮	三四
ある貧しさ (小説)	石 川 猛	三七
六號雜記	小 林 剛	三三
編輯雜記	津 川 公 治	三三
表紙繪 「サタンに見守られつつある エデンのアダムとイヴ」	ブ レ イ ク	
挿 繪 「沼の春」	小 川 芋 錢	
挿 繪 「初期エトルリア人の首」		





感想（遺稿）

——小説「春」の序——

山村 暮鳥

著者として

劈頭、こゝに此の本をよんでくれる諸氏と、自分の、ともどもに考えて見たい一事がある。

ほかでもない。

それは、ひとびとが此の大地——土を、すっかり何處へかなくしてしまつたともおもへるほど、いつしか、餘りにも忘れ過ぎたといふことである。

土を離れて、どこに、何があるか。

その土のふところから飛び出して、そこに育ち、生活し、また、そのふところを永遠のふところとして、その土をかけられなければ瞑目することのできない人間。そして萬物。國家も社會も文明も、かうしてみると、すべてはひとしく、必竟、この土の蜃氣樓とすらおもはれる。

げに、不可思議なものは土である。その不可思議には底がない。だがまた、これほど平凡で、露骨で、實質的なものもあるまい。

土は喰へない、と云つてはならない。

ああ、無價であり、また價値以上である、此の土。

これほど世に古いものはなく、これほど新しいものがない。

これほどつまらない、そして冷酷なものもないが、また、これほど美と愛と健康とにみちみちたものもあるまい。

光明もそこにおいては死であり、闇もそこからでくるときには花である。

そこは滅々、

そこは生々。

一切を、天空、海をすらも、その掌の上にながめよ。

さて此の土と人間生活との關係をおもへば、なにはともあれ、その代表的な、また、その普遍な存在として、誰の心にでもただちに描かれるであらうものこそ、農村乃至百姓のそれであらねばならない。

百姓は、まことに、土の靈である。

そのまぼろしである。

その正直銘な世嗣である。

しかるにその眞實の土の子は、一體、どんな境遇にあり、そしてどんな望みを持ち、どんな祝福と喜びと、くるしみと呪ひとをもち、その劃線のない天真と不自然とのあひだにあつて、いま、はたして、どんな生存にその日々を興へつつあるか。

自分は、この本で、それを研究しようとするのではない。

自分のつとめは、ただ、それを記録し、讀んでくれる人々に對してこつそりとそれを耳打ちする。それだけのことに盡きてゐる。

それでいいとおもふ。

なぜとなら、これは單に一個の小さな藝術の本にすぎないから。

とはいへ、百姓の兒として生まれた自分にとつて、この仕事は、なんといつても偶然でなかつたと同時に、これで、この肩の上の重荷をいくらかは軽くしたようにも感ずる。

ヘルデルリン詩抄

吹田順助

われ未だ少年のころ

われ未だ少年のころ、
一人の神はしばしばわれを
人間の叫喊と苦より救ひたりき、
かくてわれは心安らかに
森の千草とむつびたはむれぬ、
天空の微風もまた
われとむつびたはむれぬ。

なべての草木がたをやかなる腕を
汝の方へさし延ばすとき、
汝はまたかれ等の心臓を
歡喜をもて満たすごとく
汝はわが心臓をも歡喜もて満たしたりき、

父なるヘーリオスよ！エンディミオンのごとく
われは汝の愛人なりき、
聖なるルーナよ。

あゝ、あらゆる信實なる、
親愛に満ちたる神々よ！
言はましものを、わが魂の
いかばかり御身らへの愛に燃えしかを！
われは元よりその頃は、御身らを
「名」をもて呼ばず、おん身らもわれを
「名」をもて呼ばざりし、人間と人間とが、
かたみに知りて呼びあふがごと。

さはれ、われはおん身らを、
なべての人間よりもより善く知りぬ、
「エーテル」の静寂をこそ解しつれ、
人間の言の葉の、いかに空洞に響きけむ。



ヒュペーリオンの運命の歌

御身らは天上の光の中をさ迷ふ、

なごやかなる土の中に、聖なる靈たちよ！

輝しき天津風は

かろげにも御身らに觸る、

俗人の細指の

聖なる絃にふるゝごとく。

運命なく、眠れる嬰兒のごと、

天津御靈は息づかふ、

純らに守られて

つゝましき芽の中に

とはにぞ咲き匂ふ、

神々の精神は、

妙なる眼は

静けき永久の

明晰を湛へつゝ。

さはれ、われらの宿命は



いづこにも休らふをえず、

消えゆく、亡びゆく

悩める人間たちは、

眼も盲ひて刻々と

刻々と、

溪流の斷崖より

斷崖に投げつけられつゝ、

いつかは行方もしらになるがごと。

沈み行けよ、美しき太陽よ

沈み行けよ、美しき太陽よ、彼等は御身を

顧みざりき、彼等は御身を認めざりき、聖なる者よ、

ひそやかに、やすくと御身は

苦める人類の上にのぼりつれば。

さはれ、御身はわれには日毎の親愛を示す、

わが眼も御身を深く認む、妙なる者よ！

デイオナイーマのわが心をなごめしより、



神々しくもひそやかに尊敬ふ事を、われは學びぬれば。

あゝ『天』の御使よ！いかにわれは耳傾けけむ、
汝に、ディオタイマーよ！愛よ！

わが眼は驚嘆と感謝とを以て汝より、
黄金なす時代へと憧憬れゆきぬ。あゝ、その時代には、

泉はより活々とざわめき溢れ、

大地の花は愛のいぶきをわれに通はし、

銀の雲の上にはほゝえみつゝ、

「エーテル」ぞ祝福をもて、この世を眺めぬたりし。

朝顔

高橋元吉

葉は霜に錆び

花は擇り抜かれて少く

鍛えられて小さく

秋深む今

朝顔の最うつくしいときだ。

秋

透きとほる炎を秋が燃やしてゐる

閃くやうな氣體が發散して

この重苦しい空氣に充填される

どんな樹木よりも背の高い秋は

俊爽の横顔を稍うつむけ

刃のいろの時計を掌上にをいて

默然として

点火の時を計つてゐる。



彼

この地球上に生れてきたのが抑もの間違ひだったのです
ごらんなさい
ほかの人たちとは全くちがつた光が彼の顔に射してゐて
どこへ行つても
さびしく彼を別けてゐます

夜が深くなると

夜が深くなると　ときめきにくるこのころはなんだ
涯畔なき大傾斜の高みにきたり
見えざる地角にむかつて烽をあぐるこのころはなんだ
秋が深くなると　しんと涵しくるこのころはなんだ
茫漠たる枯草原の唯中にきたり
風にひらめく低草を視凝めて唇を堅く閉さすこのころはなんだ
唯知る
このころの來たれるところの
かの陰多き市街地の中にあることを。

追　憶

その決意はなかつた
しかし　死ねたら死ぬでもいいといふ氣持は　あつた
さうして自分は
山の中に向つて歩いて行つた
途中で一つの川を渡つた
川は
その岸邊に蘆が茂り
日の遠のいた空の光をうすく反射し
しづかに流がれ
さうして
その上にむかひにひろがる空が　ちつと高々として大きい
その景情の簡素にして、深沈にして、静寂にして、而してげに包容的なる
自分の魂は顫え
泣きつゝそこを過ぎた

この現實に處していかに生くべきかの問題
それが　自分の心臓を掴むでゐた飢えたる鶯だつた
自分は人に遠い山間の林に身を投げ出して





胸奥に据えらるべき歸結を索めた

夜が迫つてきた

意志が挫け 自分は敗者の苦味を噛みながら林を出た
芒の穂が絹糸のごとく反照に光り

風になびき

空には

怒れる星がらんらんとして燃えてゐる！

その苦患にも拘らず

抗争しつゝ創造することのよろこびによつて
生きていることを欲する者は 我と共に生きよ！

無邊に磅礴するこの叫び

斬つて捨つるがごときこの叫びに

寒く 頬を打たれるのを自分は感じ

らんらんたる星を敵の眼のごとくに見つめながら
暗い野道を町に向つて歩いて行つた

突然吹き起る風のやうに

これは時々自分の背骨を吹き過ぎる追憶の一つだ。

遙 拜

宮崎 安右衛門

我、我に恐る

此世に恐しさもの

我、以外に無し

而も此厭ふ可き我

亦、神を觀る

オ、神を觀る我

神に觀らるゝ我

我、今此淨處を霧の如く遙拜す。

如 是



斷章

一四

土方 定一

冬の日のひなたぼつこ

舐め愛しむ私の垢の苦き味

この蠅をして言はしめよ

悲しむものは幸ひなり ● 慰めを得なければなり

二五、一一、二六、

斷章

俺は歩いてゐる

路に附着いた自分の眼に寫るまゝなる惨めさになて

歩いてゐる

歩いてゐる

二五、一二、一五、

斷章

眞裸な月だ

冬の風よ、まとへる襦袢を吹き剥せ

その方が俺にはうれしい

二五、一一、二五、



冬夜抄

山茶花

おう

心をこめて愛さうよ

夕風にちつた

ただ一片の山茶花だ

一九二五・一二・二一

木 枯

風は妖魔のような沈黙をひきつれて春に先驅した
その沈黙に私の心は戦慄した

星斗さんらなる冬の夜空だつた

一六

津川公治



星

しんわりと

ここに沁みいるものよ

キリストのおもひ

星のひかりである

温味はなけれど

一九二五・一二・二五

おなじく

ああ 流れ星

流れ星は宵闇へ姿を消す前に

浄界への光路を示しはしなかつたか

一九二五・一二・二五

一七

鶏 肋

江 木 禮 吉

一八

ビ カ

ラヂオをやつてゐる。今宵は義太夫節の『一つ家』である。藥種屋の見世の擴聲器の前に人が塊まつてゐる。その中に佇立して、暫く立ち聴きしてゐたが、つまらないから、電車路を横ぎつて向ふ側の歩道へ渡ることにした。擴聲器の聲は一步一步薄れ、電車路を跨ぐ時、殆ど幽かと云つてもいい程になつた。そして、無意識の中に、更に幽かとなるべきを豫期し乍ら、一步を通めると、意外にも聲が再び高まつて來た。あや、自分は後戻りをしたのかな——と、その瞬間、かやうな錯覺を感じた。が、氣がつけば、眞向ふの唐物屋にも擴聲器が口を開いてゐたのである。そこで、僕は、これは珍しい經驗をしたと思つた。翌日、この經驗を審かに語つた後、『これは御創世期以來、ラヂオ發明以後始めてわれわれ人類がなし得る經驗だね。云々』と、僕は佐々木茂索さんや渡部仙園さんやを捉まへて吹聴した。が、二人とも、呆れたやうな顔をして、『うん、左様かな。』と云つたわけである。僕は、恥しい思ひをした。

Piaとは、通常、よき兩切煙草を喫した後の指腹にのこれる微嗅をなつかしむ慰樂を云ふらしい。だが、字書に依ると『土又は炭等を食ふ異嗜病』だの、『A vitiated appetite for unnatural substances as cool, sand, chalk, etc.』だのと見えてゐる。之を要するに、appetit depraveと云ふ程の意味であらう。

僕は、某大學に席を置く一學徒である。が、一向、專問とするところの書物は顧みず、一日の多くを、無用の雜書を読んだり、不埒な思考に耽つたりして、日を送り日を迎えてゐる。思ふに、僕の樂しむ讀書思考の如きも一種の精神的ビカであらう。前述の御創世期以來最初の經驗なんでも亦その一に屬してゐる。嘗て、木下全太郎はニコチンのビカを説くに當つて、惡癖、或は、Perversと云ふ文字を使つた。僕も、自分が有つ精神的ビカを恥づる心がある。だが、祕かに思ふに、藝術家にとつて、彼自身獨特のビカを有しないと云ふことは全く致命的欠陥ではなからうか。引繰返して云へば、目下の僕がニイチエを愛し、ド・キンシエを愛するは必竟、彼等の邪しまなる精神的惡癖を愛するに外ならない。この故に、僕は、先達や朋輩の輕蔑に甘じて、わが精神的乃至は肉体的なるビカの長養を計る覺悟をさめた。

左 道

左道とは禮記より出でた言葉である。仙道、或は、妖道を意味するらしい。

少年らしい耽奇癖ある僕は、曩日、スピリチュアリズムに思ひを凝らした。が、心靈學も現在のところでは靈怪奇異の事象を唯記錄し、歸納の準備をするに止まり、僕の荒唐無稽なるもうもうの夢を實現させてくれる能力を保證しないやうである。だから、頃日の僕は、剪燈、聊齋の類ひを耽讀して、纔かにこの猥雜なる人生一切を遺落した。すると、一日、『典籍概見』だか『古今釋義』だかを見てゐたら、仙術を究めんとすれば、先づ道藏目錄に就く可き旨を發見し、雀躍した。爾來、右目錄を頻に探求して、各所の書庫を獵つたが、不幸にして未だ一覽の機會がない。仕方がないから、目下僕は、手始めとして、莊子刻意篇示すところの吐納の術を練習してゐる。『吁を吐き咽を呼び、故を吐き新を納る。此道引之上、養形之人云々』とあるではないか。この吐納の術を會得したら、次に、老子の黃庭經を勉強する。その中、道藏目錄も何處かで見付かるだらう。見付かつたら——忽ち、僕は雲を呼んで龍となることも、狐と化して處女のために子を孕むことも可能事となるだらう。又、この猥雜なる人生を、往昔のプラトオが夢見た理想國、モリアの夢想國、ハウエルのアルトルシヤ、コムトの大西方共和國、ヘルツカの自由國、スキフトのハウインムス、キヤムバネ

ラの太陽市、そして、モリス、バトラア、キャベツト、ウエルズ、馬琴、履軒、等の徒が描いたユートピアより、更に、僕の好みに適した蓬萊となすことも亦可能であらう。ああ、神農の世、赤松子は崑崙山に入つて仙となつた。末世の僕は、道藏が見付からぬ限り、いや、おそらくは、見付け得て後も、小説を作つて自からの理想國を築く外はないらしい。僕にとつて、左道とは、文藝道に他ならぬやうである。

裏 街

僕は散歩道として裏街を愛してゐる。——
日本堤を横ぎつて地方橋を渡る。地方今戸町七十番地の邊であらう。川添ひに、小路をへだて、材木屋や石置場が並んでゐるから人とほりは乏しい。僕は、その小路を太く愛した。殊に、夜の十時から十一時頃、その小路を逍遙することを太く愛した。十時を過ぎれば、その邊はしもた家ばかりだから皆戸を閉ざしてしまふ。だから、その小路は所々に薄黄色く街燈が點つてゐるばかりで、殆ど全く暗闇と同じになる。その真暗い路をぼんやり歩つてゐると、堤を走る俣のかけ聲、提燈の灯、ぞめきにゆく連中の甲高い聲、新内の流しが弾く三味線。——試みに思ひ給へ。その地方今戸何番地界隈に一人の女がゐて、固より素人ではない。何某の教坊に名を掲ぐる阿嬌である。故あつて三月程前より、實家へ歸つてゐる。實家は、あの邊のことだから、下駄の表を編む商賣をしてゐるに違ひない。居職の常の口喧しい老父もゐるだらう。十時までは、家中中揃つて老父の手傳ひをしなければならぬ。寝しなのお湯、と云ふ口實で、七つ道具を持つたまゝ、橋のたもとで待つてゐる男と會ひ、肩を並べて毎夜二十分ほどの逢瀬を樂しむためにその小路を散歩するとして、更に、水の面に映る灯の色も、水際に垂れた柳の枝も、廓内から聞える絃歌の聲も、更に趣きを増すに相違ない。そして、男は、女が出て来るまでの時間を田町の岩勢亭で荒木南凌が讀むビストル強燈清水定吉をさいて居り、女は、柳北先生が『生怕柳要如個瘦、何緣禁雨禁風』と詠じた阿今の如く楚々としてゐたら

僕は、かう云ふ小説を連れて其の小路を腰歩つた。が、地震は、その小路をつぶし、荒木南凌を殺し、わが『阿今』を、『阿今』なんぞ始めからありはしない。初冬の午后の今戸、山の宿。秋の夜の向島小梅、曳般どほり。雪の日の横綱河岸。初夏の築地居留地。灯ともし頃の新富座裏。七草過ぎの堀留界隈。最早、かう云ふ僕が市井無頼の惡少と共に放浪した街々は壊滅しつくしてしまつたらしい。何年たつたら、寂びと溢みとを持つた裏街が出来てあらう。當今の如き時世では何十年過ぎても、最早、土藏造りを並べた問屋町や、堀割に渡した木橋、そのたもとに立つてゐた大榎、と云ふやうな古風愛すべき裏街は求め得べくもあるまい。

裏 街

つゞき

諦めのいい僕は、地震後、長靴を買ひ、泥濘の中を勇ましくどしやばしやと踏みにぢりつゝ、亞鉛屋根とコンクリートの壁とアンテナの柱との殺風景な街を闊歩し乍ら、遠く竹林の京都を、石甃の長崎を、杏の花の北京を、辻馬車の維納を夢見てゐる。が、東京を中心に二三十里内しか離れたことのない僕は、結句、このあはれな首都に好ましい見聞を求めて自から安んずる外はないらしい。

山の手の地理は全く不案内だから、はつきりした事は云へないが、今、裏街らしい裏街を求めたら根岸と根津と二區しかあるまい。

音無し川も、秋深くなると水が澄んで、お行の松も夕霞の中に枝を張り、名物の團子、煮ざんしよ、豆腐料理。そして、この地の住人は、神田伯龍、小島鼻山人、阪東彦三郎、岡野知十、守田勘彌、水島爾保布、お連れこみ宿、伊香保は改築中、何とか云ふ丁髷に結つた髪間が幅を利かせてゐるものこの土地かも知れぬ。この土地と云へば、水戸へ遊びに行つたら、この土地出身を鼻にかける金太郎の如き女がゐた。今に玉の井出身を誇稱する輩も出て来るだらう。とまれ、先日、秋晴れの日、音無し川を傳つて歩いてゐた

ら、寒めいた洒落た屋敷の塀の上に大きな水車が仕掛けてあつて、人足が歌を唱ひ乍ら井戸を掘つてゐた。あや、何處かで竹を割く音がするよ。

根津。この界限では僕なんぞ古顔だから、往來を歩く人の顔も皆な見知り越しのやうな氣がする。異國で自殺した著名な音楽家を妹に持つ中年の法學士は今日も酔ひ痴れて紙幣をちぎつてゐやしないか。身体中、髪の下から顔、掌まで眞黒になる程刺青した老人。赤いタイを結んだ氣取り屋の駝背の畫工。根津權現。團子坂。菊そば。が、菊人形の名残りを留めてゐた唯一の人形師は去年業を改めた。

曾て山崎俊夫の愛した根津。晩夏の夕方、藍染川の縁を歩くと、義太夫の年老いた女師匠の聲がする。そして、女髪結と看板を出した家の窓から煎藥の香ひが流れて來たら、蚊柱の立つ錢湯の軒の下に子供らが群がつてゐたりして、式亭三馬が譚話浮世風呂四編卷の上發端の明文『秋來ぬと目にはさやかに見々ねども燈籠や／＼と賣る聲におどろかれぬる盆前の胸騒ぎ』云々の一節を思ひ出させる、秋が深くなるに従つて秋刀魚を焼く匂ひが露路露路に漂ひ、藍染川の水はい／＼黒く淀んで、霧の濃い夜は近所の石鹼工場^{しおんこうじょう}の香料の香ひが惱ましく籠るであらう。そして、酒屋の露路、洋食屋の横町から、支那服を着、纏足をした女が魚の切身を提げて歩いて來たり、ヒリッピン^{フィリピン}の留學生が瘦せこけた身体によそうしく取澄ました洋服を着け細いステッキを抱えて出て來たり。何某百貨店の食堂で先月まで評判されてゐた小娘が、大きな腹をして／＼家鴨の如く現はれたりするのである。

愚草庵雜記

金子達雄

○ 孤獨といふ事はわるくはない。むしろ願はしい事だ。

それは孤獨の意識が、大きな運命の本質を呼び覺まして、本當に永遠といふものに觸れさしてくるからだ。孤獨を愛するが故に、運命的な外界の多くの現識は、その最も本質的な孤獨の意識によつて、深い生命感の中に、還元されて行くのではあるまいか。

『本當に孤獨になれたら、わたしはもはや一人ではない』とゲーテは云はれた。

『一人居て喜ばば二人と思ふべし』と親鸞はいふ。

まことに念佛は孤獨者の永遠への巡禮歌である。

○ 煩惱そのものを凝視し内觀し味得して、煩惱の中へ參徹する、その事によつて、私共は始めて眞の謙虛に當面する事が出來ると思ふ。

他との釣合を顧慮したり、他へのある態度や構へをして居る限り、決して我々の心の上に謙虛は生れてくれない。

もとより謙遜といふ様な一つの態度の如きは謙虛からは頗る遠いものだ。謙虛の上にはこそ眞の他力信は味ははれる。

誓願の不思議といふ事も、謙虛ならずして、到底仰がれるものではない。

謙虚は無論そうならうとしてなれるものではない。如何なる手段方法をつくしても、心にある持ちものを持つて居る間は生れて来ない。のつびきならぬ煩惱に、ぢかに當面して、それから逃れようと思ふ、それを解決しようと思ふ、煩惱を噛みしめ味得し、參徹し煩惱の中へ這入る事によつて、始めて謙虚に直面する事が出来ると思ふ。

それは、『謙虚の實感』といふ事ではなくして、『實感の謙虚』といふ事だ。
實感でものを視る、これより外に深いものの見方は我々にはめぐまれてはゐない。

たつた一言でもいい。

愛のこもつた深い言葉は

心の底へ

しみ通る處までしみて行く

そして

かんたんなままで無限に生きてる

愛は

無言のうちにさへも

火花を散すものだ。

○

愛は自分にとつては倫理以上だ、道德以上だ。

誠だ、至情だ、本能だ。

本能は靈魂の神秘な眼だ、と云はれたのは深い言葉だと思ふ。

○

どんなにちつぽけな事でも、

それが心の底からにじみ出して来る

善であるかぎり

自分はうたれる

人間の心の本當の美しさが

そこには溢れてゐる

つまらない言葉でも

ほんの一言でも

善をたゝへた言葉は

そのうつくしさは消えやしない

善は

恐ろしい程

深いところに根を持つて居るからだ

人間の心の底の無限性

善は

其處からこぼれて来る眞珠だ。

○

どんなにさがし尋ねても、善となるべき、立派なものは、今の自分の心の底には、ゐるやうにもない。

それでゐて自分の心の底には、善の歩みのその足音が不斷に響いてゐる。

善は全く私にとつては不可思議な存在だ。

○ 不滅の書『教行信證』を書きあげる迄の、愚禿親鸞の姿は、何といふ淋しさだ。五十餘歳まで、一つの表現をも、慎んで居られた、その姿、忍従と自重の恐ろしさを知れ。

○ 親鸞の教を聴いて、その傳記を繙いて偉いと思つた人間は、數限りなくあらう。だが然し、親鸞を生かした、親鸞が生きた、その力の本源が、何んであるかに、氣がついたものは少ない。

○ 澄み切つた静寂そのものの様な草庵の奥に、たまたま見出す念佛の聲、念佛の姿、何といふ微妙な人の心よ、全く勿体ない程微妙だ。

清く、美しく、涙ぐましくさへなる。
如來と我と、一如に生きる、その靈の姿をまともに見るのは勿体ない位、ありがたい事だ。

○ 人生五十年の生活全部を、なげ出して、永遠の眞と生命とを獲ようとした、その恐ろしい程の捨身の態度と、五十年ですべてを解決し打算しようとする、功利的小乘の態度とは、何といふ大きい、へだたりのある事であらう。

同じく道を求むると云ひながら、祖聖と私共との間には、これだけの大きいへだたりのある事を痛感して、限りなく恥ぢ悲しまずには居られない。

○ 私共は、祖聖を一個の宗教家と見、一個の哲學者と見る前に、もつとよく、祖聖の魂にふれなければなるまい。

彼は徹頭徹尾、己れ自らの爲めに、その深い大きい生存への執心を、徹底的に永遠に解決しようとして苦んだ一個の赤裸々な人間であつたといふ事から先づ知つてかからねばならない。

そして、この宗教的精進の奥底に、如何にして彼が生命の中に宗教を見出したか、如何にして生活が宗教になつたかの一大秘義をさぐらねばならない。

九十年の親鸞を掘り下ぐる事は、私共の一生の仕事だ。

○ 自分が生きるといふ事は、自己の運命を生死以上に生かしきる事だ。

そうした神秘な力に合掌する事だ。

誓願の不思議を仰ぐ事だ。

人として一番深い要求にかへる事だ。

そして人間最奥の要求に生き切つた、祖聖の魂に參徹する事だ。

祖聖の宗教的經驗の上に、その先驗的要求を聞く事だ。

其處に、始めて親鸞の具體的經驗にふれて、自己の運命を、生死以上に生かし得る神秘の道が開顯される。

去年の歌の中より

蓬 原 生

枝うつりする鳥の居て晝深くしづもる庭に櫻散るなり

この磯の潮は澄めり春日照り底つ海松のさゆらくが見ゆ(五浦にて)

古る道に立つは高松その蔭の小さき茶店小さき石ぶみ(勿來關址にて)

小夜風呂にしづみゐて心くつろげり青葉にそゝぐ雨のきこえて

青草に照らひみなぎる光かも虫をあさりて飛ぶ雀居つ

雨降ればひそけき街にあか／＼と照る秋の灯の親しかりけり

暑き陽のかげるとすれば秋近み芙蓉の花に湧き出づる風(好文亭にて)

まなかひに一つ白帆のかがやきて湖寒く夕づきにけり(土浦驛にて)

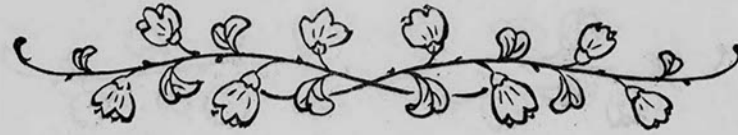
霜寒き庭に照る日や黒々ともぐらが盛れる土の親しさ

春近みこの縁側の日だまりに子供の爪を剪りてやるなれ

父の部屋に本取り散らし遊ぶ兒のいたいけなればただにほほむ

垂れ髪はいまだとゞかぬぼんのくぼ兒の後容の何ぞかあゆき

息つめて親のいのちをまもりまます君の心をよそに思はず(母堂の重病に侍し給ふ某氏に)



沼のほとり

小泉 純 一

三〇

沼べりに霜のきらふはあはれなりかすかにぞわがすみわたりをる

○

朱らひく朝のひかりに霜しるくしとど草木のぬるるこのごろ

霜さらふ沼岸にしてさしかはす冬木の梢のこのかそけさは

霜さらふ冬菜ばたけにありありと見えてむれたる雀このころ

霜さらふ磯馴は枝のひろごりて庭を続べたる位置のよろしさ

さ青なる霜ばれ空にぬきんでてむらだつ桐の實はきらびやか

○

冬ばれの日ざしぬくとき芝原にあそぶ子供の音ぞゆるげる

枯れ芝の地冷えはかなしそこゆゑに立ち去りかねつ冬日しみつつ

沼ぬちをひろびろとほる新道は冬木の丘にただに向へり

落葉せる櫻山べに今日くれば冬日にほひて人音もせず

つきつぎに枝をはなるる落葉あり目にとめてきつ櫟林に

冬日さす櫟林に子供さてたまる落葉をかさはじめたり

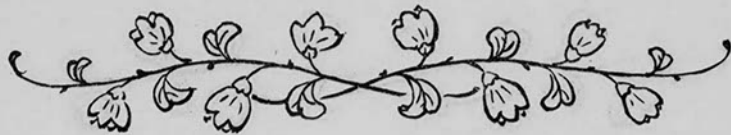
日だまりのくぼみのここに松かさとどんぐりあまたころびあひたる

ふもとにはま菰みだるる丘の路われは下るも晝の光りに

芝山の斜面に長き影あとし日ざしただけり黄葉せる木々

冬空にせせらぎ立つる小流れの土橋よこたふあはれさも見つ

三一





○一人居の眠はならず夜くだちて山の雪踏み下思ふか君は
町裏にひとり住みつつ家庭は本草とぼしく冬に入りつつ

かげさむき庭にひそかに咲きいでし数柑子の花に晝は向へる

○古梅園の香氣ことなる筆賜びし友よ霜夜ぞよく火にあたれ

格子戸の外に竹みて霜むすぶ月の八つ手をあにれと云ひぬ

霜月の月にぬれたる薬屋根に八つ手白花よりそひ立てり

○霜ふれる伊香保の山の湯にこもりねむりしといふふみごときたり

戸障子の震動たかくなりきつつ今ぞ夜ぶかく汽車行きすぎる

停車場につきしにやあらむ一たびは笛とよみたるあとのひそけさ

ここにして冬は二たび來むかへり今年もつひに家出でざらむ

○

この沼のところどころにたまる水あらはににぶく冬ざれにけり

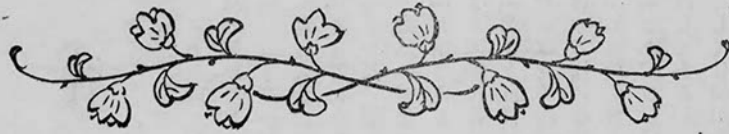
わがをれば沼むかひなる森かげに夕べは煙ほそぼそのぼる

冬の日ののちりちに家普請のこだまつづけり沼岸萬處

まつかふに夕やけあびて働ける屋根の大工ら物を云はざり

夕陰のさむくらめる向つ岳に相よぶ鴉ややしづまれり

冬ざれの夕かげにふかし沼のべにわが家居して時ゆきにけり



從兄

木 暮 亮

三四

三

三十分以上も過ぎてから帳場の男に案内されて来たお由達は多少きまり悪るげに私の部屋の隅に坐つた。私の思ひなしか、去年會つた時よりもいくらか面寒れして見えた。

『丁度一年振りですね。』

私は言葉に窮してさう言ふと、彼女も心持顔を赤らめて、『はあ。』とうつむいた。

『そんなにかしこまつてゐたつて仕様がな。亮さんに遠慮は要らないんだから。』

『さうだ。早くお湯に行つてさつぱりしていらつしやい。随分ひどかつたでせう此の雨降りでは。』

從兄の言葉を繼いで、私もさう言つて、お由と彼女の姪と言ふ小娘とをお湯にやつた。

『お由さんも大膽になつたぢやないか。君と夫婦氣取つて湯治に来るなんて、戀をすると女の方が却つて男より大膽になるね。』

『男より盲目だからかも知れないよ。——お由はね。此の頃しよつ中、頭が痛むつて言つてゐたんで、此の夏には此の湯に来る筈になつてゐたんだ。ひとりでも何だからと言ふので、あのお富が學校始まるまで一緒に来る様になつたんだ。』

『お富つて言ふのは君達の仲を知つてゐるのかね。』

『さあ、少しは感づいてゐるかもしれない。もう十五だからね。僕が此の湯に来たことを誰にも言はぬ約束はしてあるが。——然し面白いんだ。あんなちびの癖に途中で僕達があまや仲よく話をしてゐると機嫌を悪くして仕様がなかつたんだぜ。あれでも嫉けるんだと見えるな。』

『然しそんなものを一緒につれて来るなんて後で困るに決つてゐるがなア。』

『いや。それはよく口どめしであるから。』

『あんな小娘の約束を信じられるのかい。』

『ところがあれがついてゐればこそ僕の行爲は何とでも辯護できるぢやないか。まあそんなに案じることないよ。——僕達もお湯に行かうぢやないか。』

私共が手拭をさげて母屋の前の廊下を通るとき客室が一杯になつてゐる爲め母屋の廣間に寝起きしてゐる二三組の浴客が目についた。外はまだ雨がしきりに降つてゐた。

その夜他に部屋が都合にならぬと言ふので四疊半の私の部屋に一緒に寝ることになった。而して暗くなる頃から鎌詰や乾物などを餉臺の上にならべて酒を飲み始めた。お富は始めはつまらなさにそれを見てゐたが、やがて持つて来た雑誌をとり出して讀み始めた。お由は器用な手つきで酌をして、始終笑顔を見せてゐた。私は酒がまはつて来ると從兄の愛人としてのお由に對する敬意がうすれて来たし、從兄の口からもおのろけの言葉がほぐれて来た。

『もうお前のお酌は良いから、お富と一緒に湯に行つて来。』

先刻まで賑かに騒いでゐた向ひの棟の浴客達もいつか静かになつてゐた。退屈したお由は寝不足なねむたげな目で私達を見つめる。まだ遅いと言ふわけではないが、從兄は思ひ出した様に女達を逐ひたて、お湯にやつた。

『ひとつ困つてゐる事があるんだ。』

二人になると從兄は眞顔になつて切り出したので、私もついとりこまれた。

『お由さんの事でもあるのかね。』

『あ、學校の方は、しれた所で何うにもなるが、一寸方面が違ふんだ。——去年君が遊びに来た時に、僕

の助手をしてゐる伊奈川と學校で逢つた事があつたらう。覺えてゐないかな。』

『いや、覺えてゐるよ。あの身体の大きな男だらう。』

『あゝさうだ。困つた事には、そいつがお由に結婚を申込んで居るんだ。』

『君達の仲を知つてゐないのかい。』

『始めの中は知らなかつたらしい。始めて云つても此の春の事だが。勿論お由が愚圖々々して煮え切らない返事をしてゐる中に、奴も、僕達の間を感づかぬわけはない。さうなつてみると、お由は餘計斷れなくなつたんだ。あれは、あの學校の卒業生で町のものだから、學校にも校友にも勢力があるんだし。お由が僕の爲めに伊奈川をはねつけたとなれば、あれだつて黙つてゐないから。』

『然し君のあることを知り乍ら、然も結婚する氣なかね。』

『そりあ、あの男は非常に眞面目な一徹な男だし、また僕の事だつて何れ丈疑つてゐるかわかりやしない。兎に角餘程お由にはまいつてゐるんだからな。お由の曖昧な返事で安心出来なくなつて、二月程前に町の口さゝを頼んで、今度はお由の姉にあたつて來たんだ。』

『姉つて、君の下宿の女中頭をしてゐるあのお豊さんか。』

『あゝ、そのお豊さんと言ふのは僕とお由との仲を知うてさんざんお由を説教した姉さんだからな。勿論僕よりも伊奈川に餘計好意を持つてゐるんだ。僕達の仲を裂く爲めもあるし、また仲に立つた人の手前もあつて、とうとう承諾してしまつたんだ。』

『それは困つた事をしてくれたものだね。しかし、本人がその氣でないなら……。』

『尤も、お豊さんも後では私達の仲が深くなる許りなので困り切つてしまつて、一旦伊奈川さんに貰つて頂きませうと約束したのだから、いままら何うとも斷れませんが、貴方がそれほど眞剣ならいまの中にお由をつれて何處へでも行つて下さい。あとの事は何うにでもわたしが心配しますから。』つて言つてゐるんだ。

『うむ。うまく轉任の口でもあれば良いんだがねえ。』

『そんなにうまい具合にありやしないよ。而して伊奈川の奴は、早く結納を取り交はして安心したいと急いでゐるんだ。それをお由の口で五日のばし十日のばししてゐるんだからね。』

『とお由さんまでが、眞面目な顔で嘘をついてゐるんだね。罪づくりだなア。』

お由さんは何んなことが

あつても君と一緒にならうつて言ふんだね。』

『心變りはしてゐないつもりだ。尤も此の頃では互にいらした氣持から喧嘩をすることはあるが……。』

その時恰度お由たちがお湯から戻つて來たので從兄は、彼女の前でさう云ふ話題を避けたかつたらしい、それつきり話を切つてしまつた。

次の朝、部屋が空いたと言ふので、從兄はお由と連れ立つて見に行つたが、やがてそれに移ることに決めた。

『君は此所にゐるんだらうね。』

從兄がお由と一緒になつて引越さうとしてゐるのを見て私はさう訊いた。

『いや、僕も向ふの部屋に行くよ。君の邪魔をしちやわるいから。』

『僕の邪魔は良いが、君と一緒に向ふに行くのは何うかなア。』

『大丈夫。大丈夫。僕んところにも遊びに来るさ。』

彼はゆうべの事などは忘れてしまつたかの様に氣輕にさう言つて笑ひながら部屋から去つた。

その午後從兄は宿帳を持つて入つて來た。

『何う書いたものかな。』

彼の私を見つめた眼は頗笑んでゐた。

『何もかも正直に書くさ、何うせ君の細君と思はれやしないのだから。その方があとで面倒がなくて良い。』
彼は正直にさうつけ終ると。

『誰か知つてゐる人が来てゐないかな。』

と獨言しながら前の頁を繰つた。

それから三日目の午後、降り續いてゐた雨のあがつたのを幸、はなをひいたり、トランプをしたりして遊び倦きた私共は、四五丁も上手にある湯元を見に行くことにした。

長い急な石段をのぼりつめると崖の上の杉森の中に小さな祠がある。其處から宿を振りかへつてみると三軒の温泉宿が同じ位の棟数を並べて、あけ放たれた客室を玩具の箱の様に見せてゐる。

『あら、直さんが来てゐる。』

『あら、ほんとに。』

私はその祠の側に立つて宿の方を見おろしてゐると斯うした驚きの言葉を耳にした。それからお由が不安げな表情をして、それを從兄に知らせたのを見た。

『誰が来てゐたつて良いぢやないか。』

從兄はお由から注意されて、森の向ふに見えた二人の青年を見て一寸額を曇らしたが、却つてそれを逐ひ除ける様にさう力強く云つた。聞いて見るとその直さんと言ふのは從兄の勤めてゐる學校を出た町の青年であつた。從兄は私共を促して祠から離れ、湯樋に沿ふた坂道を登り始め、半丁程も行つたかと思ふ頃突然大聲で俗歌を唄ひ出した。女だちはその前を小足で急いで行つた。私が曲り角で振りかへつてみると先の青年達はあの祠の所に來て私の後姿を見送つてゐた。

遅れ咲きの萩のそたこに見える湯元のあたりを歩きまはつて來て、一度各自の部屋に戻つてから私共は汗ばんだ湯あがりを氣にしながら湯に入りに行つた。

恰度他に誰も浴客がなく午後の日脚が女湯との境の板に靜かに斜めにさしてゐた。從兄の言ふ儘に男湯と一緒に入つたお由は初の中こそ遠慮勝ちに湯槽の隅にひたつてゐたが、やがて色白なふくよかな四肢をのびのびとして何か從兄と話してゐた。また私は私で湯槽の縁に頭をのせ、軽い氣持のよい疲勞の甘味を味ひながら瞑目してゐた。すると、その時突然誰か入つて來た氣配がした。目を開いて見ると、少し狼狽した様子でお富が何かお由の耳に私語いてゐる。二人の何處さなく落ちつかぬ態度が氣にならぬではなかつたが私は目をとぢた。すると今度はお由と從兄との私語が聞える。二度目に目をひらいて見ると、お由は急いで身体を拭いてゐる。從兄の顔にもさつきお富が持つて來た不安の色がうつてゐた。

『何うしたんだ。何か起つたのか。』

とうとう私までがその不安に感染した。

『何でもない。お由に逢ひ度いつて來たものがあるのさ。』

從兄は、急いで着物を着て出て行くお由を見送り乍ら、事もなげに答へた。私は何うして、その時それと氣がつかなくなつたらう。從兄はきつと私からもつと訊ねられることを豫期してゐたに相違ない。ところが、私は先刻あつたあの直さんがお由に逢ひに來たのだらうと一人決めに決めてしまつた。而してまた頭を湯槽につけた。すると從兄が來て以來毎夜のみ續けて、寢不足になつてゐたのに、少し歩きつかれたせいか心地よい睡氣にさそはれてしまつた。

ふと目を開くと、從兄は着物を着て出てゆく所であつた。彼は私を見ると、

『良い氣持でねてるからすつぽかしてやらうと思つたんだ。』

晩に僕んとこで一緒に飯を食はうぢやない

か女中にお膳を廻はさしておくから。』と言つて出て行つた。

その夜私共四人が膳について居ると、すうと障子が開いて卑しげな笑を浮べた帳場の男の顔があらはれた。一寸挨拶をするとその物間ひたげな目をじろりとお由の顔にむけて、低い聲で『一寸』と合圖してまた

廊下の暗がりの中に消えた。するといままで晴れやかに頬笑んでゐた彼女の顔が心持曇つた。而して彼女はお茶碗の残りを急いで口に入れてしまつて、そつとに起ちあがつて廊下に出た。が然し間もなくまた部屋に戻つて来て何やら二言三言従兄の耳に私語いた。

「うるさい奴だな。で前は行く氣か。」

彼の聲は明かに不快な調子であつた。而してあまり自分のこだはり方が自分でも氣になつたものかまたはそれかくしの爲めか、彼は膳の上に前屈みになつて皿のものをつついた。

「さあ、わたしも何うしたらいいかと思つて。」

「お前が行きたかつたら、行くさ。」

従兄は下をむいた儘でゐたが、お由には彼の言葉が棘々しく感じたのであらう。彼女はちつと彼の横顔を見つめてゐた。これまで、黙つて此の有様を見てゐた私ははじめて何事が起つたのかと訊いた。

「伊奈川が来たんだ。」

「伊奈川が？」

私は此の突然な思ひがけない言葉にそれを終りまでちつと聞いてゐることが出来なかつた。

「あゝ、いま小西館に来てゐるんだ。今日お晝頃にお由が泊つてゐないかつて此の宿に來たんださうだが。恰度留守だつたし、また色々僕の事を聞かされたんだらう。で、此の宿に泊らずに小西館に行つたらいいんだ。さつきお湯で訪ねて來たやつがあるつて云つたらう。あいつなんだ。今また二度も帳場に来てお由に今夜小西館に訪ねて來いと言つて行つたのだ相だ。」

「そりや困つた事が出来たもんだね。」

「いろ／＼訊いてみると、伊奈川の奴。僕達が此方へ來た日に僕の下宿に行つてお由が此の湯に來てゐると聞いてあとをつけて來だらしいんだ。僕が一緒だつて言ふ事は、何うも此處に來て始めて知つたらしい。」

お由、お前、ゆく氣なのか。」

彼女はそれまでちつと俯向いた儘身動きもせず考へこんでゐたが、斯う云はれると急に面をあげて従兄の顔を見乍ら、

「やつぱり、行つた方がよくはないかと思ふの。いま此處で憤らしてしまふのは損だもの。」

「然し向ふぢや、ぶん／＼憤つてゐるかも知れないよ。」

「そんなことはないわ、きつと。」

「何だかわかるもんか。」

「さうかしら、怒つてゐたら、何んとても云ひ譯をして、……」

「ぢやお前にさう云ふ自信があるのか。」

「ない事もないわ。何んとても云ひ譯があるもの。」

「……ぢや行つてくるさ。然し何んて言はれたつて向ふに泊ること丈は嫌だつて言ふんだよ。」

お由は着換へ始めた。而して彼女が室を出る時、

「萬一手荒なことをしたら聲を出すんだよ。良いか。而して要心しく早く戻るんだよ。」

と従兄が念を押した。

「まさか伊奈川が此處まで來やうとは思はなかつたなア。……しかし、お由の話ぢや、あいつ僕がお由と一緒にゐることを知らぬのか、あまり氣にとめてゐないらしいんだ。尤もいま頃は何んと言つてゐるかしれないが。」

私はお由が出て行くと間もなく従兄を促して自分の室に歸つた。彼は来るなり火鉢の側に寝そべつて無茶に煙草をふかしてゐた。

『然し君、あまり呑氣な事も言つてゐられないぢやないか。此の上おめ／＼學校に出ることも出来ないだらうし、何奈川だつてさう／＼は欺かれて居ないだらうから。』

從兄は、まだ何うにかなる位の考へらしかつた。が、傍から私が色々と空想でつくりあげて彼の恐怖心をそゝつたので、しまひには心配し出して、起きあがつて手を拱いた。

『僕は忠告じみた事を言ふのは嫌だけど、何うだらう。お由さんを伊奈川に呉れてやるわけにはいかんだらうか。そりあ君の淋しさは察しないではないけれども。……』

私は思ひ切つて言ひ出した。此の間の晩はそれを云ひ出す機會が無かつた。然し從兄は黙つて疊を見つめたまゝ返事をしなかつた。

『君が田舎に来る時は一生を田舎にくすぶらす積りぢやなかつた譯だ。いま頃こんなことを云ひ出すのは遅すぎるけれども、然しまだ間に合ひさうだから。……』

『もう言つて呉れるな。僕にだつてこれでも考がある積りだ。然し今更お由を手離すことは出来ない。それぢや僕がお由を誘惑したことになる。僕の男がたゝなくなる。』

『男がたつ、たゝぬの問題ぢやない。君の一生の浮沈に關することだ。そりあ、お由さんがしやんとした家の娘なら兎も角、まあ一種の水商買ぢやないか。』

『君はとんだ差別を設けたもんだね。僕は何んなことがあつてもお由を捨てる氣はないよ。あれだつてまさか別れる氣はないだらう。』

『いや、それほど女を信じられる君は寧ろ幸福かもしれない。それほどの仲なら、僕だつて相手の女が何んであらうと問題にしない。然し愛情は義理で繋げるものぢやなし、消長もあるしね。』

『いや、僕達の場合は變らない積りだ……』

『うむ。それならそれでも良いさ。然しそれならそれで伊奈川の方にも手段を講じなければならぬね。一

—何うだらう。僕は此處から君達がすぐ上京したらと思ふんだが。お由さんがゐなくなれば、お豊さんの言ふ様に、伊奈川だつて思ひ切つてしまふだらう。』

さう言つてゐる中に私は、好人物らしい伊奈川が却つて氣の毒になつて來た。彼は今朝どんな氣持で家を出たらう。五里の山道は何んな夢に導かれて來たのだらう。耻も見榮も忘れて何度も呼び出しに來た彼。またお由の甘い言葉に封じこめられてゐるかもしれないぬ人の好さ。……然し一徹ものの彼は從兄とお由とが上京したと聞いたらお由を探しにそのあそを逐うて上京するかもしれない、而して見つけ次第擲り殺してしまふかもしれない。私がひとりであるうした空想の中に漂つてゐる中に從兄もとう／＼上京する事に決心した。而して私共はその實行の方法について頭をしぼつた。

四

『もうお由が歸つて來た時分だね。向ふの室に歸つて來てゐるかもしれない。行つてみて來るよ。』

場合に依つては明日の朝にも上京しようと思つて決めた後、從兄はとも角お由の歸りを氣にしておたので襖をあけて出て行つたが、その後姿は私にはひどく淋しく思はれた。何んなことが起つて來ないものとも限らぬと思ふといつか私も亢奮してゐた。而してまた考へるともなく宿では何う思つてゐるだらうと思はずにゐられなかつた。

するとやがて從兄がひどく不機嫌な顔で戻つて來た。

『何うしたんだ。まだ歸つて來てゐないの。』

私は直ぐ尋ねた。

『人を馬鹿にしてやがる。お由の奴、何時歸つて來たもんかぐう／＼寝てゐやがるんだ。癪にさはつたから叩き起して來た。いまにやつて來るだらう。』

彼は火鉢の向に安坐をかいた。煙草を持つてゐた指は震へてゐた。

「當人がそんなに安眠してゐるなら、却つて良いぢやないか。」

「いや、ほんとに癪にさはつたよ。余程蹴飛ばしてやらうかと思つた位だ。」

「まあ良いさ。いや、却つて女の方が、僕達より上手だかも知れないよ。きつとうまくまるめ込んで來たんだらう。」

その時すうと微かな音をさして襖があいた。伊達巻姿のお由がおくれ毛をかきあげながら入つて來た。

「あい、此方によつて亮さんにお詫び云はないか、いまいで亮さんは色々心配して相談してくれたんだぜ。それに何んだ。お前は、今歸つたとも言はずに圖々しく寝てゐやがつて。」

お由は室の隅に座つたが、從兄からさう云はれると、心持私の方にいざりよつて、頭を下げた。

「とんだ御心配をかけて何んとも申譯が御座いせん。——今度は從兄に向つて『だつてあんたが何處にゐるのかわからなかつたんですもの、それにお富が寐やう寐やうつて言ふんでわたしも……』」

「そんな云ひ譯は聞き度くない。それよりお前はこれから何うするつもりなんだ。」

お由は從兄から斯う唐突に訊かれると、きよんととして彼の顔を見かへした。

「何うするつて言つたつて——」

「謙さん。そんなに感情に許り走つちや駄目だ。それよりお由さんの方の成行きを訊いてみようぢやないか。ねえお由さん。」

「別に何んでもなかつたんですの。」

「やはりお前が俺と一緒に居ることを怒つてゐやしなかつたのか。」

「だつて、わたし前からよく言ひわけしてゐたもの。」

「それで、伊奈川はそれを信じてゐるつて言ふのか。」

「えい。」

「それで。」

「それでつて？ やつぱりあの人、小西館に來て一緒に泊つてくれつて言つたわ。」

「お前、なんて言つた？」

「わかつてるぢやないの。」

「そんなことでお前を歸してよこしたのか。」

「えい、それから、結納の事も言つたわ、何日にしようつて。」

「何んな返事をした？」

「今こゝちや困るから、歸つてから姉さんとも相談して決めようつて。わかつてるぢやないの？」

「ぢや伊奈川は何もかもお前の云ふ通りになつてゐるんだな。——然しそれが何日まで續くと思つてゐるんだ。お前は此の儘で町に歸れると思つてゐるのか。」

「何うして町に歸れないつて言ふの。」お由はちつと從兄の顔を見つめた。「伊奈川さんは明後日歸るつて言つてたもの。」

「あさつて歸るんですつて？」

これまで黙つて聞いてゐた私は、此の時思はず口を挟んだ。すると彼女は從兄からちつと見つめられてゐた顔を私の方にむけて、

「えい、もと／＼二三日の積りで來たつて言ひますから。——あの人私共のことをそんなに疑つてやしません。氣の毒になる程おひとよしなんですもの。」

「馬鹿！ いくら伊奈川だつてさう／＼馬鹿にされてゐるもんか。——あいつきつと復讐するに相違ない。」

「復讐つて、？」

『復讐しないでゐられないよ。』

『だつて、いま言つたぢやないの、あの公私の事を疑つてやしないつて。』

『そんなに甘くゐるとあてが違ふぞ——ぢや何か、お前伊奈川の所で……』

『またあなたは何か氣をまはしてるのねえ、馬鹿らしう。』

二人の氣持が段々險惡になつて來たので、私は、

『そんなに喧嘩腰になつたつてしょうがないさ。お由さん、あなたの眼にはさう見えるかもしれないが、さう簡単に片付いてくれれば良いんですがねえ。然しさう思ふ通りにならなかつた場合に困るから、僕達はさつきからその相談をしてゐたんですが。きいてみるとう——』

と、言つて、彼等がどつち道切迫つまつた關係に立つてゐる以上、却つて此の儘、ゆけるなら何處へなりと落ちのびた方が良いことを述べて、彼女の心持を訊ねて見た。

『亮さんもさう言つてくれるし、俺もさう決めたんだ、お前黙つてゐるが、いま更いやとは言ふまいな。』

從兄の語氣には充奮した調子が加つてゐた。して今までうつ向いてゐたお由は、さう云はれると顔をあげて彼を睨む様にして、

『そりや、あなたの行く所なら何處へでもついて行くつて言つてゐるぢやないの、でも何所へ行くつて言ふの。』從兄はひと先づ東京に出て、行先を誨して、それから職を探して生活しようと、いまで私と相談してゐた事をかいつまんで話した。お由は此のあぶなつかしい話を不服さうにきいてゐたが、しぶんながら承知して都合に依つては、少し許りの貯金を當座のたしにしても良いとさへ云つた。場合によつてはあしたにも上京する手筈に決めて、二人が私の部屋を出たのは一時すぎた。

ある貧しさ

石 川 猛

一

十吉の家は宏壯であつた。けれど彼の家に一日現金で三十圓とある日は少なかつた。十吉の家はその町で舊家であつた。そして十吉はその町で東京××新聞の通信員をして居た。

十吉には兄があつた。兄と父とは彼が十四五の頃から常住喧嘩してゐた。父は十吉が十九の年に死んだ。十吉の兄は二十五になつてゐた。後には母がのこつた。母はその時五十八だつた。十吉は肉親の、殊に父も死ぬといふことを初めて知つた。そして母をいとはしく思つた。十吉はそれで××大學の豫科一年生をよして故郷へかへつて來た。

十吉が故郷へかへつたのは十九の年の十一月だつた。停車場へ一人ぼつとりと降りて、歩き出さうとした時、彼は最初の略血をした。けれど、其時はたいした事もなかつた。それから、十吉は二十一の年まで、毎年夏になると一度づつは略血した、その間、郵便局の事務員になつたり、縣廳の耕地整理課の雇員になつたり、時には運送屋の店先に坐つた。けれど、それも二三ヶ月づつだつた。一度の略血で大抵四五ヶ月は寝てゐた。

その頃兄は臺灣にゐた。兄の中學時代の馴染みの女と一緒に逃げてゐた。家は貧乏した。それで結局は十吉も寝てばかり居られなかつた。二十二の春、十吉はその町の新聞通信員になつた。新聞記者はつらい職業だとしみじみ十吉は思つた。けれど、午前の原稿を客車便で送ると、午後は電話だけなので休は樂であつた。

十吉は二十五の年まで通信員で母を養つて来た。一家を支へて来た。二十四の年に一度略血した。その時十吉はギョツとした。『矢張りいけないかな』と思つた。が二日程ねると又役所まはりをし初めた。仲間の誰も十吉の病氣を知らなかつた。解れば職を止めさせられる、と十吉は考へた。職を止したら家を手離さねばならなかつた。母の生きてゐる間は、それだけはしたくなかつた。それが、父に對する唯一の幸道であると考へられた。殊には家を手離す時の母の悲歎を見たくなかつた。十吉の体はこうして壊れかかつて来た。

二

十吉の家は宏壯であつた。昔、その町の徳川の血統をひいた殿様の下に、御普請奉行がゐた。その人が殿様の別荘を造つた。それが非常にその殿様の氣に召した。殿様は御普請奉行に褒賞として、御料林の松三本を下された。御普請奉行はその松三本で家を建てた。その松は頗る大きかつた。出来上つた家は茶室や離れやを加へた、宏壯なものだつた。明治維新になつて、その奉行は貧乏した。その家は賣物に出た。が長い間買手はなかつた。十吉の父はその頃やつと二十であつた。その家を見て氣に入つてしまつた。そして、祖母達の反對もかまはず、自分の家を買つてその家を買つた。十吉の父はその家を非常に愛した。幾年かたつて、その町にも電燈がつくやうになつた。けれど十吉の父は、あの白い陶器や、黒い針金を部屋天井に張り廻されるのを嫌つて長いこと電燈を使はずにゐた。その町で電燈をつけないのは、數軒になつた。とうとう十吉の父は電燈をつけた。『どうかして、軒先から引つづけることは出来ないものかね』と相談して哈哈と工夫に嗤はれた。『天井の上を通せないものかね』と更にたづねた。

家は藁葺であつた。工夫は誰も天井裏へ入るのをいやがつた。それで『藁屋根は漏電するとあぶないですからね』と斷つた。その夜は明るかつた。明るい電燈を見上げて十吉の父は『困つたものだ』とつぶやいた。

三

十吉の家は宏壯だつた。夏は涼しく、冬は暖かだつた。微かな雨は降りだしてもわからなかつた。漸く點滴の音に『雨だな』と合點いて障子を明けて見たりした。裏は竹林だつた。雪の日はたわわに雪がつんで、竹はゑれた。厠の明障子に、さらさらと雪の音がした。燭臺をかかげて、手洗水をとるのに雨戸をくると、南天の實は眞赤にたわんでゐた。雪はしんと降つた。

庭には常緑木や紅葉がいい按配に植ゑられてゐた。梅の古木に、春は春鳥が鳴いた。梅の古木の下は古い沼だつた。

梅咲くや水に行人の影うつる
鶯や見上ぐれば杉のうれなりし

十吉の父は、さうした句を幾つもつくつては喜んだ。榮達も何も彼もなかつた。ただ十吉の兄が心配にはなつてゐたが……。

死の近く、十吉の父はその家が失はれることを恐ろしがつた。そして十吉の兄の心配で一杯になりながら死んで行つた。

この時まで十吉の父は町役場の収入役をしてゐた。月給は五十圓足らずであつた。

十吉は、その父と、母とその家を胸に重苦しく受けとつた。けれど、家は彼も愛してゐた。

四

十吉の宏壯な家の茶室にはもう爐はしきつてなかつた。その茶室に彼が二十五の八月の或る日、凝乎と寝てゐた。

「十吉は五度目の咯血をした。」

十吉は凝乎と目を閉ぢてゐた。

『助からないな』と思つてゐた。けれど、それは彼にとつて最早や苦痛にはならなかつた。以前は考へた、童貞で死ぬ残り惜しさも考へる事もなくなつた。支局長が新しいので、休みたくはなかつたし、無理をして咯血した。それも残念ではなかつた。給料は五十圓足らずである。母には何時までたつても樂な一日すら送らせることが出来なかつた。そしてこれからの出来なさに違ひない。働かせどうしに働かせ苦勞させ一日も樂にさせなかつた母の臨終は見るにたえまい。金はもう幾何も無かつた。藥代も食料も家裏の畑を賣つた金であつた。あとはこの家と地所だけである。母の悲歎も見るにたえまい。それよりは、この家のあるうち、それに、其時には自分をどんな悲しみに陥すかしない母の臨終を見ないうち、母にみとられながら死ぬのは、どんなに幸福であるか知れやしない。母は悲しむだらう。けれど母一人となれば、兄だつて黙つてはゐないであらうし、或ひは兄も今は案外身廻りよくしてゐるかも知れない……。

十吉は凝乎と目を閉ぢてゐた。
『……今度生れたら』

金箱しよつてゐて……』

ふと十吉は微笑した。

枕元にうづくまつてゐた母は十吉の顔をのぞきこんだ。

『いくらか、うさやかね』

『ああ』

萩の下、茶畑のあたり、沼のほとりにリィリィ……と蟲はないた。

時刻は五日の月が松の下枝をはなれる頃であつた。(完)

六號雜記

勝手な話

小林 剛

理屈を云ふ人は人の中で一番不幸な人である。理屈と云ふ字は又、字の中で一番偉れな字である。

× 莊子と孟子とが、或る冬の日に泳ぎつくりした事があるそうだ。孟子は水は温いと云ふし、莊子は水は冷いが身体が温いから大丈夫と云つたそうだ。ひよつとしたら、この逆を云つたのかも知れない。とにかく、二人で競泳したそうだ。

× それからずつと後の事、高等学校で二度、落第した男があつたそうだ。

× 泣くだけぢやいくら泣いても戀は出来ないうそでもないから、甘い言葉の二言三言は云はなくては駄目だ。

× 馬鹿な親は子多叱り、馬鹿な男は女をいぢめる。この馬鹿が本當の馬鹿だ。

頼まれたから仕方がない。無精者がこゝに挿絵解説をやる。

— 表紙のブレイクの「アダムとエバ」は一八〇六年の作である。既に晩年に入つた彼ブレイクがこの世の煩悩を觀て、遠き過去の未汚の人間を想像したのは當然すぎる位當然の事である。宗教的色彩の強い彼の作品に於て、その特色の濃厚なと同時に最も人間に接近してゐるのは之等晩年の作である。力強いと云ふのでない。崇高だと云ふのでない。舊約聖書傳説より材を取つて、よくこの様に人らしさを表はした彼人自身を考へたくなる。この繪の上方に飛んでゐるのはサタンである。そしてその下方に横つてゐるのは邪惡の蛇である。この兩者の間に挟まれた人間は、エデンの園に於けるアダムとエバであり、同時に現在の人類すべてである。

「初期エトールヤ人の首」はエトールヤ作品中の代表物である。それにはギリシャの影響が明かに見えてゐる。このブロンズ作品は多くのブロンズ物の様にながらうろになつてゐない。エトールヤで発見された時、その頭の後方は破れてなくなつてゐた。この「首」の様に頭部の周りに髪毛がロールし、立

五二

派な髪毛が顔に迄捲ひかぶさつてゐる様な形はタレンワムの初期の貨幣にも見られるのである。この「首」の高さは六吋である。現在、Tyskewicz Collection の中にある。

× 小川幸輔氏の「春」は山村さんのお宅にあつたのを拝借したものである。寫眞には折角の色が出てゐないが、すべてに明く、ゆつたりとした春が何時までも心に残る様な繪である。描かれてゐない土、そして空をも想像するに充分な春すべての表現である。

× 私一人の考へと云ふわけではないが、大体に於て挿繪は表紙と中二枚にして、中二枚を各一枚づつ、東洋と西洋のものを取つて行かうと考へてゐる。この計劃には誰も文句を云はないだらうと思ふ。

寄贈雜誌

櫻風、童心、光輪、願望、朝、新時代、新しき村通信、茨城文藝、群像、愛と眞、夜光虫、みなと、野葡萄(創刊號)、茨城青年、人間群(辻本浩太郎氏主幹)、フレット(朝王樹(橋田東聲氏主幹))

— 寄贈書は江戸市荒神町後藤清一氏宛に送ります。

編輯雜記

津川 公治

○ 風にゆられる一本の草のように強くあれ。

これが弱いといふのか。むしろ、はさに徹せよ。柿の枯枝のような強さにあるな。美しいと言ふ。醜いと言ふ。だが追はず、隠れぬ自然。それを觀るものゝ心に生き輝く自然。このいのちに生きよ。

○ 「製作でできない處は行爲でやる」と、ミケルアンゼロは言つた。ああ、このころである。

○ 快く玉稿をめぐんでくださる方々よ。心で、淨財で援助してくださる方々よ。「感謝」なんといふ言が、あなた方にたいして、そちら容易く、この口で云へませうか。自分はまだ合掌するばかりである。

○ 森があり、林がある。ちつとに無數だ。美しい鳥の聲さへもきこえる。だが水よ、ただ澄みきつて、黙して流れてゆけ。大きな、廣い、海へ、海へ。

○ 星の光りは無限である。ひとりひかるからである。ここに、一九二五年は遠く。木枯よ、星の夜空を吹け。されど、希望があり、爲事があるものは餓死するわけにはゆかないのだ。諸兄姉の新しい生に光りあれ。

— 一九二五年、三月三十一 —

十二月號 定價二十錢

グリルバルツエルの性格(評論)

ある時の詩六章(詩) 故山村 暮島

ある夜の饗宴(詩) 小牧 暮潮

沼のほとり(短歌) 小泉 純一

板敷山大覺寺(短歌) 山内 脩

菊(詩) 高橋 元吉

晩秋詩章(詩) 津川 公治

作品(詩) 石川 猛

從兄(小説) 木暮 亮

樹(貓詩) 土方 定一

秋から冬へ(小説) 小林 剛

個性心理學と云ふこと(論文) アドリ

六號雜記 小川 公治

表紙繪「牧師」 土方 定一

屏繪「沙翁劇舞臺から」 森川 正太郎

挿繪「キリストの首」 マルツエル

カット 後藤 清一

毎月一回一日發行

(本號定價貳拾錢)

定價表

普通	壹部	金貳拾錢	郵稅
特別	壹部	金五拾錢	郵稅共
半年分	普通壹部	金壹圓四拾錢	郵稅共
半年分	特別壹部	金貳圓七拾錢	郵稅共

○ 誌代はすべて前金御拂込の事

○ 郵代引替は一切謝絶の事

○ 郵代代用は意増の事

大正十四年十二月二十五日印刷納本

大正十五年一月一日發行

水戸市下市荒神町

編輯者 津川 公治

發行所 水戸市上南三ノ丸

印刷所 水戸市上南三ノ丸

印刷所 水戸市上南三ノ丸

印刷所 水戸市上南三ノ丸

印刷所 水戸市上南三ノ丸

印刷所 水戸市上南三ノ丸

印刷所 水戸市上南三ノ丸

印刷所 水戸市上南三ノ丸

印刷所 水戸市上南三ノ丸

印刷所 水戸市上南三ノ丸

印刷所 水戸市上南三ノ丸

印刷所 水戸市上南三ノ丸

印刷所 水戸市上南三ノ丸

印刷所 水戸市上南三ノ丸

印刷所 水戸市上南三ノ丸

印刷所 水戸市上南三ノ丸

印刷所 水戸市上南三ノ丸

印刷所 水戸市上南三ノ丸

コロタイプ

繪石 葉書版印刷

— 本誌の挿繪参照 —

山中鶴森堂

— 水戸市上市青木新地 —

新刊書籍雜誌
精巧活版印刷
教科書

伊沼書店

— 土浦町 —

— 電話・土浦二一七番 —



賀 正

齋藤勇太郎 寺門幸藏 寺門南湖 蔭山秋穗 林正三 菊池五郎

白牙會

水戸市上市幸町

HAPPY NEW YEAR
1926

彼等自身社

— 水戸市下市荒神町 —

津川公治 小林剛
土方定一

賀 春

桃源社 水戸市荒神町津川方

金子達雄 後藤清一 津川公治

藝術御寫眞



(玉眞堂)

小貫寫眞館

—水戸市上市泉町—

あたらしい

學用品
文房具

みのるや文具店

—水戸市下市東橋町—

【電車は郡役所前でお降りください】

五六

美しくき今宵を——
麗はしき映畫に……

配するに定評ある

オルケストル・ア・パシヨナタ

を以てす……

松竹直營

ハラマウント社 水戸・泉町
フオツク社の 美都里館
特約館 電話八七八番

賀正

樂譜と樂器。學用文房用具



虹晴堂書店

—水戸市下市本四丁目—

黒光社同人

—水戸市上市泉町—

キリン洞方

五七

梅羊羹
水戸の梅
のし梅
井熊羊羹

總本舗

賀正

井熊製菓株式會社

本社—水戸市上市南町(電・六〇五)
營業事務所—水戸市下水門町(電・七〇〇)
第一工場—水戸市上市幸町(電・七七八)
第二工場—水戸市下水門町(電・七〇〇)
製函部—水戸市下水門町(電・三八五)

年始の御贈答品
……新型洋品一切……

賀正

山崎洋品店

—水戸市上市南町二丁目—
—電話・水戸七三一番—

月刊
雜誌

茨城文藝

—(〒.30)—

縣下唯一の自由投稿雜誌

新刊書籍雜誌・文房用具

知新堂

—水戸市上市南町—
(振替東京四七三九六番)

和洋雜貨

新刊雜誌

文房用具

賀正

永井商店

—水戸下水竹隈町—
—電話四八二番—

是を讀まねば中堅青年たる資格がない

月刊雜誌

茨城青年

—◆新年號主なる内容◆—

新年の第一歩……茨城縣知事 末松偕一郎
普通選舉と公民教育 文學博士 深作 安文
天皇思想の宣傳……………西村 文則
青年の覺悟……………前代議士 根本 正
如何にして生くべきか……………太田 秀穂
民風作興に關する一提唱……………步兵少佐 沼田 徳重
新年に際して……………跡見 花蹊
城南隨筆……………代議士 小久保喜七
梅里先生碑文を讀む……………本多 文雄
母性愛について……………文學博士 佐々木信綱
喜憂交々たる八十年 (豊田美雄子先生回顧談)
其他數十頁……………

◆新年號は紙數増大百二十頁◆定價は従前通り◆

發行所 茨城青年社

水戸市上市南町一六 振替東京六七九七五

—定價一ヶ月(一冊)貳拾五錢 送料壹錢—

是を讀んでゐれば文化人たるに恥ぢない

和洋新刊書籍雜誌

正 賀

學校用文房運動具

萬 年 筆

……水戸市泉町二町目……

平野書店

—電話 一六六番—

—振替三一五六七番—

謹賀新年

水戸市上市南三ノ丸

柴活版印刷所

電話 四三〇番
振替東京二五五一番

彼等自身 一月號

大正十四年十二月二十五日印刷
大正十五年一月一日發行
(每月一回一日發行)



運動用具

洋品雜貨

スエター

ETC.

優 秀

廉 價

型

新 揃

モ リ 商 會

＝水 戸 市 上 市 向 井 町＝

◆年始の贈答品……

◆防寒用品一切……

埼玉縣浦和町

浦和本店

電話・浦和二三九番
振替・東京三四二九番

水戸市上市向井町

水戸支店

埼玉縣川口町本町

川口支店

定價金貳拾錢

(郵税貳錢)